

「小田原を奪いし伊勢宗瑞なる男、相模の人心を籠絡し、次々と臣下たらしむ者にて、油断あるまじき候であると、雪下殿では警戒してござります」

那古寺二一世別当・義秀の言葉は暗い。

「鎌倉別当殿も憂いてござろう」

「はい」

「おいたわしき限りだわ」

里見義通は何度も頷いた。

雪下殿の別当・空然は古河公方・足利政氏の子である。惣領でないため、早くから若宮別当に据えられていた。

「空然殿と申す御方、なかなかの〴〵気性と聞く。古河公方家に嫡子として生まれたなら、ひとかどのお働きを為されたであろうのう」

「滅多なことを！」

義秀は窘めた。そして、ふたりは笑った。

四方山の話を重ねるうちに、伊勢宗瑞のことに触れた。

鎌倉では大船に新しい城を竣工しているという。これは鎌倉にとっては、頭に覆い被さる威圧に過ぎない。いや、その目的は、鎌倉の支配に非ず。大森氏を葬り去ったうえは、早晚、三浦攻めを敢行することだろう。

とまれ鎌倉の寺社仏閣は、伊勢宗瑞の影響を日に日に感じているという。

「人心を籠絡する者は、治世に富む者と拝察するが、いかに」

「小田原では大森時代より租税が軽くなったと、民は喜んでござる」

「租税が？」

「四公六民と申します」

生産の六割を民に還元する大名は、当時、希有といって過言ではない。

「それでは、民からも人気も出ような。考えるは易し、実践するは難しの租税を行うとは、なかなか侮り難い」

「三浦介殿も警戒しております」

さもありませんと、義通は頷いた。

「いまの三浦介は、たしか……」

「はい、扇谷殿の御舎弟にござります」

三浦介義同は扇谷上杉定正の実弟だ。

かつて三浦介時高は、太田道灌・大森氏頼に並ぶ三家老として、扇谷上杉家を支えてきた。しかし、長年子宝に恵まれなかったため、主家・扇谷上杉氏から養子を迎え後継者としたのである。

しかし皮肉にも、その直後に、実子に恵まれた。いかに聡明な武将も、肉親の情の前には凡庸だ。実子かわいさの念で排斥される危惧を覚えた養子・義同は、養父もろともその子を殺害しようと挙兵した。

この愛憎劇は養子側に軍配が上がった。

三浦のことを話していると

「楽しそうな話ですな」

と、そこへ里見左衛門佐実堯がやってきた。

「やや、兄上。きておられたのか」

そう云って、実堯は義秀に向き直った。

「御舎弟殿も久しく」

「いやですよ。抹香臭い口上は、寺の中だけにしてくださいませ」

「いえ、人は表裏があつてはなりません。拙僧も左様ありたいと願う途上の端くれにござります」

義秀は涼しい表情で答えた。

「またまた、難しいことを。むかしはよく頭を叩かれましたなあ。懐かしいことです、忘れもしません」

「あの頃と比べれば、いやいや、御舎弟殿も立派になりましたなあ」

「勘弁してくださいよ」

頭を撫でながら、実堯は義秀に一礼し、義通に向き直った。

「首尾は？」

「上々に」

「結構」

「長居をすると、家中の採め事に巻き込まれそうで、気が気ではありませんでした」

「さもありません」

義通はこの実堯を通じて、古河公方・足利政

氏との連絡を取り結んでいた。

安房という地形は、内房では鋸山の国境が難所となる。このとき外房は世上不穩で交通の往来に適していない。すなわち陸路では不自由な状況にある。

古河との行き来も、陸路では儘ならないが、実は舟路ならば造作もなかった。

安房と内陸をつなぐ水利を担うのは、海賊衆と呼ばれる内房在地集団だ。彼らは里見氏に服し、いわば里見水軍と称されることもあった。

その里見水軍は、主に里見実堯が掌握していた。義通が内政に没頭できるのも、偏にこの弟あつてのことである。

表裏の定まった一族は、結束が堅い。

いまの里見氏は、創業の季節ただなかにある。

実堯の古河行きは、近々執り行う鶴谷八幡宮修繕の棟札に、古河公方の名を冠するための折衝だった。

このように勢力を拡大しようと尽力する者の傍らで、義秀は次の世代を、ふと思つた。

「ところで、若殿はいかがでござるか」

義秀の問いに、義通はやや云い辛そうに

「大昌寺に」

「おお、楽山和尚のところへ」

「次の当主ともなれば、政の理想ばかり追わずに、もう少し現実を見なければもう」

「例のことです」

「在地豪族の権利を一扫し、里見が安房一統を掌握。学問から知り得た知恵だろうが……」

「まさに、云うは易し行うは難し、ですな」

「学問は必要であるが、いやはや、困ったものではないか」

義通は苦笑いを浮かべた。

「ところで、若殿は御歳いくつか」

義秀の問いに

「さて、いくつであったかな……」

「若殿も大殿の御子にござれば、きつかけさえあれば、いくらでも変われましょうぞ」

「ならば、よいが」

「ここで話題となっている若殿は、義通の嫡

子・太郎義豊である。

里見はこのとき、義実の頃と変わりなく、安房の寄騎筆頭という立場にある。当然、在地豪族の理解に支えられており、彼らの権利や僭越も目溢しすることでまとまりを得ていた。

が、義豊はこの寄騎制度に疑問を抱き、一統による安房の大名を夢想していた。

このことが理想であることくらい、義通も承知している。が、乱世にあつては融通変化が必要。急な改革は理解の外である。

後継者として義豊の行く末がどうか、迷いを隠せない義通であつた。

十十十

## 鶴谷八幡宮（2）

夢酔 藤山